現代短歌分類辞典

別名 現代短歌総索引

第五十七巻

現代短歌分類辞典刊行所 編纂
津端　亨

津端　亨　編纂

現代短歌分類辞典

第五十七巻

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

現代短歌分類辞典

57

昭和五十六年七月十五日発行　定価一、七〇〇円

著者発行
兼印刷者　津端　亨

〒111
東京都台東区鳥越一―十一―八
発行所　現代短歌分類辞典刊行所
代表者　津端　亨

振替　東京　三―九三一一四
電話　〇三―八五一―九八六九

目次（第五十七巻）

	歌数	頁数
青海（蒼海）	三四	一
青海亀	一	三
青海潮	一	〃
青梅	四二	七
青裏山	一	〃
青瓜	二	〃
青魚	二	〃
青雲海	一	〃
青枝	二	八
青江	一	〃
青えだ	八	九
青枝豆	一	〃
青江ら	一	〃
青衿	三	〃
青落葉	四	九
青鬼	四	一〇
青鬼ら	一	〃
青大空	五	〃
青香	二	一一
青蛾	一	〃
青貝色	一	〃
青柿	二八	〃
青垣	一九	一四
青垣ぞい	一	一五
青垣渕	二	一六
青垣山	四四	〃
青香久山	六	二〇
青陰	二	〃

あをがけぐすり　一　二一
青　笠　六　〃
青飾り羽　一　〃
青　樫　二七　〃
あをかし（雑誌名）　二　二四
青柏葉　一　〃
青ケ島　三　〃
青瓦斯　一　〃
青　霞　三　二五
青蔭ーして　一　〃
青蔭ーせーり　二　〃
あをがすむ　一　〃
青　風　二　二六
青帷子　一　〃
青片渕　一　〃
あをがち　二　〃
青かつた　一　〃

青かづら　五　二七
青かづらせる　三　〃
青が嶺　一　〃
青　金　二　二八
青　皮　一　〃
青　瓦　三　〃
青　峡　三　〃
青　徽　八　二九
青　貝　八　三〇
青貝入り　一　〃
青貝いろ　四　〃
青貝ずり　一　三一
青貝の間　一　〃
青　楓　一八　〃
青楓葉　二　三三
青　蛙　七八　〃
青蛙子　一　四〇

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

青蛙たち　一　四〇
青　楓　一　〃
青　一　〃
青かまきり　二　〃
あを瓶　一　四一
青仮面　一　〃
青　鴨　二　〃
青　萱　七九　〃
青蚊帳　六三　四八
青がやかくり　一　五三
青茅草　四
青萱原　一三　五四
青萱むら　二　五五
青萱山　三　〃
青ガラス　一　五六
あをからーず　三　〃
青がらす玉　一　〃

青からーぬ　二　五六
あをからーむ　五　五七
あをからーむーと　二　〃
あをからーん　二　〃
青　刈　八　五八
青かり　七　〃
青がり　一　〃
青（碧）かりき　一二　六〇
青かりーける　一　〃
青かりーけれーば　一　〃
青からーし　一九　〃
青かりーしーかな　三　六二
青かりーしーかも　一　〃
青かりーしーと　一　〃
青かりーしーとぞ　一　〃
青かりーにーけり　三　六三
青かりーにーし　一　〃

青かる	四	六三
青か枯るる	二	〃
青枯れ	一	六四
青がれ	一	〃
青枯れダリヤ	一	〃
青　鰈	二	〃
青けしれば	一	〃
青　木	一七六	〃
あをき	三、八四九	七九
合　計	四、四九三首	

付号番号付短歌の説明一覧表を
第五十九巻に掲載いたします

あをうみ【名詞】（青海）青うな原のこと

寂しければ渚に立ちて朝を見るこの青海は君につづけり　神谷昌枝

三保が崎まつ風早み青海の沖しずかにして辺波さわげり（鷺）　佐佐木信綱

むさし野と信濃と往きつかへりつつ二とせ吾は青海を見ず　片山広子

武蔵野の春の黒土おもひ出て悲しむときは青海も憂し①　川浪磐根

ものの芽のほのかに赤む切厓の末やわらかに青海となる⑫　與謝野寛

桃柑子（かうじ）芭蕉の実売る磯街の露店（よみせ）の油煙青海にゆく　若山牧水

百尺（ももさか）のきりぎしの上よ見おろせば青海の水岩に触りてゆらぐ⑨　窪田空穂

やうやくにして岩の高処にのぼりたり青海の果を陽の出づる所④　石榑千亦

山下の青海の辺にゆかずして荒（すさ）まじき風にたじろぐ児らは⑤　高田浪吉

闇の夜の浪うちぎはの明るきにうづくまりゐて蒼海を見る③　若山牧水

ゆきゆけど青海のみなる岬かげ小漁村ありバス駈けぬけぬ　上山幸子

あをうみ

あをうみ

夕ぐれのあまき憂愁に疲れたる心を秋の蒼海に投ぐ②　近藤　元

吉浜の真珠の荘の山ざくら島に重り青海に乗る㉘　與謝野晶子

蘭の香や竜顔光りいでたたす春なごやかに青海凪ぎて⑫　金子薫園

我こころうしろの君に抱かれて瞳は青海の果を見るかな①　矢沢孝子

わが立てる嶋山かこみ照りわたるまろき青海はすべてささ波　窪田空穂

わが船の行手知らなくに蒼海に腹をかへしてとぶ魚の見ゆ㊀　美弥国樹

酔い痴れて酒袋如すわがむくろ砂に落ち散り青海を見る③　若山牧水

丘の家下にながめて平らなり松の木末と青海の色⑭　與謝野寛

丘の上にわが見おろすや青海と赤岩山がつくる隈みを　窪田空穂

あをうみ【名詞】（蒼湖）

青湖のかなたにとほき三上やま朝よさやけし不楽しきはなし　加藤将之

蒼湖きしより山へ濃緑の中に点々と白し女沙羅木　佐佐木信綱

二三軒肩よせてをり蒼湖の向うの岸のさびしき湯宿（豊旗雲）　佐佐木信綱

独木舟の少女が過ぎしあとゆらぎ瑠璃の蒼湖にただよふもみぢ葉　伊藤左千夫

あをうみがめ【名詞】（青海亀）正覚坊とも呼ぶ　海坊主の名もある

日向の水から頭（あたま）もたげては外気吸ふ蒼海亀の両眼またたかず㊂　五島茂

あをうみじほ【名詞】（青海潮）

濁流と青海潮のもみあひの押しつ押されつ濁りひろがる⑤　鈴木康文

あをうめ【名詞】（青梅）梅の実の未熟にして青きもの

朝かぜの吹きゆく庭に青梅をやうやく一つかじり終へたり⑤　鹿児島壽蔵

朝東風（あさこち）は眼も澄みにけり捥ぎたてを板の間匂ふ青梅のいろ③（角川文庫）　木俣修

熱海より伊東の町へ入る路によろめきながら添へる青海①　近江満子

東屋のみぎりの梅の青梅子（うめ）のあなみづみづしすずなりにして　伊藤左千夫

青梅こぼれおちてころげる石段雨にぬれた葉書をうけとる④　米田雄郎

あをうみがめ

あをうめ

青梅と雀と描きしひだり手に書持つらむかまた逢ふ時は①　長塚　節

青梅にあめふりそそぐほととぎす土の笛吹くやうにも鳴けば①　青山霞村

青梅の落ちたる土の蔭ふみて戦(いくさ)を祈る人むらがれり⑩　尾山篤二郎

青梅のおちてこぼるる山の房いとど都の思ひやらるる㉕　窪田空穂

青梅の酸ゆき味はひ思ひつつわがいねており朝空のもとに⑮　前田夕暮

青梅の花の大きさよ熟落ちし朝のうつろの眼(まなこ)の奥に④　山下陸奥

青梅の歯にしみとほるすっぱさの好もしきかなしみじみと嚙む①　三苫京子

青梅の一つが落ちて居る庭に朝降る雨雷を伴ふ（1980年短歌年鑑）　見学　玄

青梅の日にけに重く垂枝は今はたわみて地につかむとす②　米田雄郎

青梅の幹揆き立つる母の猫仔猫は飛べる蝶を見あげぬ　北原白秋

青梅の実の落ちゐたる下蔭にいくたびか行きし疎開の時は⑰　齊藤茂吉

青梅の実の大けくを盛り足らし贈りしをとめ今もわすれず③　安江不空

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

青うめの実り豊かと人ら言ふ吾が子生まるるときゆゑによし①　寺門一郎

青梅の空しく落つるつかさには蟻のいとなむ穴十ばかり⑰　齊藤茂吉

青梅はかたきぞうまきころころと若くて音のよきをば選ぶ①　三苫京子

青梅ははやく饐ゆるか笊にして一夜に酸の匂ひ放ちつ②　寺沢亮

青梅を持つ手うしろにまはしつつわれを見あげしをさなごあはれ①　中島哀浪

梅酒を瓶に作ると青梅のこちたき皮は端居して剝く（新万葉集四）　関井こう子

帯解けて子らより落ちし青梅はしばし弾みぬ板敷の上に（背振）　中島哀浪

籠に盛る青梅の色あざらけしころころと板の間にころがりて㊀　久保井信夫

かたければかたき程すゆし塩まぶししみじみうまき青梅を嚙む①　三苫京子

木の下(もと)によその子どもとわが子ども青梅食むをけふ見たりけり　古泉千樫

こひ緑垂るるにこもる青梅の玉いとけなく未だちひさし　斉藤茂吉

寂寺(しづでら)の若葉ぐもりに青梅のここだく落ちて人ふまずけり（朝雲）　岡麓

あをうめ

あをうめ

すき透るガラスの壺に青梅の粒選りて入れる一つ一つ拭き⑥　四賀光子

背戸口の笹の小雨の音ききて青梅の実をわが漬けゐるも②　米田雄郎

つぶらなる青梅ここだ眼には見ゆ寂しさ遺らむ人の遠しも㊀　北原放二

年毎に身をもてあます初夏のわびしきときにみのる青梅①　三苫京子

面(つら)しかめ面しかめては青梅の酸ゆきをあはれ音立てて噛む④　窪田空穂

新衣そでせばければ青梅のみのひとつだにつつみかねつつ　窪田空穂

軒先に青梅の実の落ちてあり少く生(な)りし実落ち尽さむか㉓　照憲皇太后

部屋ぬちにそこはかとなく漂へる青梅の実の匂なつかし①　窪田空穂

みな月の日光のうすき苔の上いまし落ちたる青梅一つ　三苫京子

路上に出た枝から青梅をもぎとり袂にいれるとしっとり重い⑪　土屋文明

わが児はも顔色わるしと憂ひつつ青梅のかげをともに歩めり②　前田夕暮

わが亡母(はは)もさびしさ言ひて死ににけり梅雨ふる雨に青梅は落つ㊀　金子不泣

生駒あざみ

幼な犬少女に寄れる庭のすみ青梅は自らくさり落ちたり　門間春雄

あをうらやま【名詞】（青裏山）

わが家よりゆふ炊ぎするけむりたち青うら山へなびきそめにし⑤　中村憲吉

あをうり【名詞】（青瓜）白うりの一種、皮の青きもの

瓜播きて身を養はむ青瓜の季節の朝を思ふなり吾は⑮　前田夕暮

葉がくりの茘支青瓜をかしきろしぼみし花を己が尻につけ㊀　岡本大無

あをうを【名詞】（青魚）

味淡きばいかるのうみの青魚を我が食しにけりろしやびとのなかに①　石原純

透きとほる浪の真なかにひれふりておごる青魚かれがうつつなさ　潮みどり

あをうんかい【名詞】（青雲海）

上層は果てしなき蒼雲海の山谷こゆる機音の震動⑤　窪田章一郎

あをえ【名詞】（青枝）

あをうらやま

あをえ

青枝さしふふめる梅のうらわかみみなぎし妹らをたべてしぬばゆ⑤　安江不空

夕されば部屋の寒けさ雪凝る杉の青枝は窓に向へり（新万葉集一）　岩渕要

あをえ【名詞】（青江）

よしきりは一つ鳴きたり青江さす若葉しげなる葦原の中に（地懐）　橋田東声

あをえだ【名詞】（青枝）

蒼白くふくらまし樹に少年がよぢて青枝ほきと手折るも④（現代短歌大系）　前田夕暮

えにしだの青枝にそよぐ夏風の朝まっ白く蝶舞ひにけり㊀　森山縫子

さるをがせ栂の青枝多く散れる嶺の高原にさへぎられ立つ⑥　鹿児島壽蔵

さわやかにそよぐ合歓の葉朝かけて蟬なきたつもその青枝に㊀　金子信三郎

しゃきしゃきと樫の青枝刈る男鋏鋭き音たてにけり④　前田夕暮

高きより伐りおとす樟の青枝はにほひ放てり冬日の庭に①　加藤淘綾

鉢のばら伸びし青枝の先ごとに太き蒼をつけて張る②　鈴木光子

花過ぎし庭の山吹古株をめぐりて年の青枝ひいでつ②　寺沢　亮

あをえだまめ【名詞】（青枝豆）

茄子の瑠璃青枝豆にほほづきの紅ゐ一ついれて荷造る㊀　森山縫子

あをえら【名詞】（青江ら）

昼さむく目覚めて念ふ青江らもさだめを負ひてつひに征きたりゃ②　坪野哲久

あをえり【名詞】（青衿）

麻衣に青衿つけて髪だにも掻きは梳らずありし妹はも⑤　尾山篤二郎

麻ぎぬに青衿つけてつくろはぬ少女とみれどまどふ心を②　高橋希人

道いそぐ波切少女の布子黒し青襟はづかにつけてゐるかも⑥　尾山篤二郎

あをおちば【名詞】（青落葉）

いよよ乾く道べにたまり青落葉おのおの光る児のうつつなく㊀　三浦義一

ひそひそ雨ふりはじめる青落葉のうへ秋らしい光がしめり⑪　前田夕暮

あをえだまめ

あをおに

わたる日のひかり沁みゐる青落葉こころけ遠く土の上に見つ　三浦義一

あをおに【名詞】（青鬼）

虚偽、残忍、さまざまの青鬼がうれしがりつつめぐり居り其処に（切火）　島木赤彦

鐘馗はいつまでも眼をいからせ青鬼はいつまでもえり首をつかまれ⑥　土岐善麿

血のたるる亡者の舌をぬき出して青鬼赤鬼見てゐるところ②　米田雄郎

逃げまどふ赤鬼青鬼つかまってとりこになる鬼数しれずゐる①　清水信

あをおにーら【名詞・接尾語】（青鬼）

青鬼ら踊りをしつつ影と共に去りにし壁の次ぎにわが影（切火）　島木赤彦

あをおほぞら【名詞】（青大空）

岩そそる奇すしき高嶺並みよろひ青大空を狭めてありけり②　下村海南

樹の間よりのぼる夕煙しづかにも青大空に消えてゆきつつ⑯　川田順

谷ゆけばしいんとこころはすきとほり青大空は吾がまうへなり（日没）　米田雄郎

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com